

# 幼児は身体表現活動のなかで何を得ているのか

鈴木 裕子\* 八木 佑奈\*\* 竹内 和\*\*

\*幼児教育講座

\*\*卒業生

## What Young Children Gain from Physical Expression Activities

Yuko SUZUKI\*, Yuna YAGI\*\* and Nodoka TAKEUCHI\*\*

\*Department of Early Childhood Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

\*\*Graduate, Aichi University of Education

In this study, we examined what young children gain from physical expression activities. We asked children to draw pictures on the same topic before and after a physical expression activity on that topic. Then we analyzed the oral statements collected from 6 examiners on the transformation of the drawings.

As a result, what young children gain from physical expression activities were divided into 5 concept of 18 categories (Commitment to subject, Transformation of subject image, Awareness of expression elements, Transformation of the self, Consciousness towards others). The results encourage nursery and kindergarten teachers to carry out more physical expression activities.

### I. 問題と目的

#### 1. 幼児期の身体表現活動の課題

保育内容としての領域表現には、身体表現、音楽表現、造形表現、言語表現の分野が存在する。そのなかでの身体表現は、「いま、ここ」<sup>1)</sup>のダイナミックな表現活動が醍醐味であるが、一方で保育者にとっては、展開や支援方法への悩みが大きい。「いま、ここ」でしか現れない身体表現から、「いま、ここ」の子どもが何を感しているのか、どのような内面の現れとしての行為なのかをじっくりと読み取る時間が存在しない。保育者は刻々と変化する子どもの行為に応じて、言葉を掛けたり掛けなかったり、自身がモデルとなったりならなかったりといった判断を下さなければならない。したがって保育現場では、身体表現活動の展開に困難を感じ、苦手意識を持つ保育者が多い。

各表現の特性を見てみると、造形表現はイメージを表したものを作品として残すことができる。音楽表現は楽譜にして残し再現することができる。言語表現は文字に残すことができる。しかし、身体表現は、他の表現とは異なり、何かに残しておくことができない<sup>2)</sup>。そのため、自分の表現を振り返り見返すこともできない。換言すれば、身体表現は、表現する主体と客体が一体となった様態を呈して現れる。「私」という一人が「する、見る(主体)」と「している、見

られる(客体)」を同時に行う。それは、表現の媒体が「身体」であることに由来している。その意味では、独自さを潜在的に持ち、子ども固有の表現様式としての一回性、反復性といった性質が強調される<sup>3)</sup>。この性質によって、保育者は、身体表現活動のなかで子どもが何を得ているのかを読み取ることが難しいと感じる。そこで本研究では、その「何」を明らかにすることを試みる。それは、保育者にとって、身体表現活動のなかでの子どもの内面の変化を知るための一資料となり、その後の指導方法を講じる手立てにはならないかと考えられる。

#### 2. 幼児期の身体表現活動の研究動向と研究方法

幼児の身体表現活動にかかわる研究の傾向として、個々の保育者の実践例をもとにした事例研究により、身体表現活動の効果並びに意義を省察する方法が多くを占めると、長野<sup>4)</sup>は報告している。それは、幼児期の身体表現という活動の特性として、一般的な発達と教育効果を区別することが難しいために、量的または客観的指標に基づく効果検証が極めて困難なためでもある。また幼児を対象とする研究の一般的特性として、対象者に対する直接的な面接や質問紙調査の回答に信頼性が得られないため、行動観察が主流となる。日常の実践から指導内容や技術を積み重ねていくことは重要であるが、大綱化に至るまでの展望が見えにくいと

いう課題を、本分野は持ち続けている。

本研究では、これまで行動観察とは異なる方法から身体表現活動の成果や効果にアプローチすることができないかという問題意識をもとにした研究方法を検討した。その結果、本研究では、身体表現活動前後に描画活動を行い、その描画の変容を評価者の口述テキストを分析する方法を用いて、身体表現活動で得るものを考察する方法を試行することとした。

### 3. 描画表現の変容分析の妥当性

身体を動かすことは、内面の表れに通じると考えられている。身体を動かす活動は、心理的療法として使われることもある。ダンスセラピーはその1つである。ダンスセラピーとは、人間が持っている踊ることへの基本的な欲求に支えられた心身療法の1つであり<sup>5)</sup>、内面を身体で表す治療法と言える。ダンスを通じて、感情の解放や身体意識の強化、他者との交流などを促進し、自己肯定感に代表されるような自己認識の改善や強化する<sup>6)</sup>ことを目的に行われている。そこでは、様式化され構造化された動きのパターンは扱わず、問題行動などをもつ対象者に応じて、どのような動きが用いられてもよいとされている<sup>7)</sup>。

一方、子どもにとって描画表現は、自己の内側にあるいろいろなもの、感情や情動・本能的欲求・願い・考え等を外に表出することを意味していると富田<sup>8)</sup>は述べる。レオ<sup>9)</sup>は、子どもは言葉で表現したいと思う以上に、また表現できる以上に、描画を通して明瞭にオープンに心を開いて語りかけてくるし、描画にはその個人の胸の内がかかっていると述べている。またF.ワロン<sup>10)</sup>は、子どもは絵をことばのように用いるので、絵を読むことができることも述べる。実際に、絵から子どもの感情を読み取る試みは、心理判定をはじめとして様々な場で用いられている。

浜田<sup>11)</sup>が、H.ワロンの見解をもとに「幼児期の表現は、どのような形であれ、身体を介して行われることが多い、運動が心的生活のすべてをあらわす」とし、古市<sup>12)</sup>は「身体表現はその人が空間に描く絵のようなもの」とするように、身体表現、描画表現ともに、心の中のものを、身体を用いて外に表す行為である。身体表現活動後に描画表現をした場合、身体表現活動のなかで感じ取ったこと、得たものが描画表現に現れるのではないかと考えられた。

平井<sup>13)</sup>は、身体活動前後の描画に心身の変容が示されると考え、樹木画：バウムテストを利用し、リズム・ダンス活動の心身に与える影響について実験を行った。実験は、1本の木を描き、リズム・ダンス運動を行った後、再び1本の木を描くというものであった。その結果、木の大きさ、描かれた位置、幹・枝・葉・根の様子の変化から、それぞれの絵がパターンに分類された。そこから、運動後は、喜びや高揚した気分が

得られ、積極性が増し、活動的エネルギーが増大していることが推測され、リズム表現運動が心身の状態に影響や変化を及ぼすことが示された。この研究は、対象者が中高生、大学生、中年者であったが、言葉の表現の少ない幼児であれば、身体表現と描画表現の結びつきが、より直接的と考えられ、むしろ典型性が高い結果が得られると考えられた。そこで、本研究では、身体表現活動の前後に描画表現を行うという実験的実践をもとに、研究目的へのアプローチを試みる。

## II. 方法

### 1. 対象

岡崎市内T幼稚園5歳児H組27名(男児14名, 女児13名), A組29名(男児18名, 女児11名)の計56名

### 2. 題材

身体表現活動、描画活動の題材は「雲」とした。子どもにとって身近な題材であり、日常経験での差が出にくいと考えられ、かつ描画技法の能力差が生まれにくいと考えられたためである。身体表現活動では、「いろいろな形の雲」「雨雲」「飛行機雲」「雷雲」「夕焼け雲」「自分の好きな雲」の6つの場面を設定した。

### 3. 実験手続き

日時：2014年11月

場所：岡崎市内私立T幼稚園保育室

#### 手順

- ・11月6日に「雲」を題材とした1回目の描画活動を行い、11月14日に「雲」を題材とした身体表現活動を行い、直後に「雲」を題材とした2回目の描画活動を行った。
- ・描画活動は1回目2回目ともに2クラス合同で実施した。水色八つ切り画用紙とクレヨンを使用した。
- ・1回目の描画活動は、「あったらいいなと思う雲、自分の好きな雲を描いてください」と子どもに教示し、同時に雲の写真(積雲, 雨雲, 飛行機雲, 雷雲, 夕焼け雲)を提示し、描画活動時には写真を保育室内に展示した。
- ・身体表現活動は、20名程度のグループに分け、3グループで行った。1グループ25分程度の活動時間であった。身体表現活動では、はじめに身体を使った簡単なリズム遊びを行い、その後の「雲」の題材をもとにした身体表現活動を本調査とした。保育室にビデオを3台設置し、対象児の動きが重なって見にくいという問題の解決を図った。
- ・2回目の描画活動は、写真は提示せず、1回目の描画表現と同様の「あったらいいなと思う雲、自分の好きな雲を描いてください」の教示を行った。

#### 4. 分析方法

##### 1) 身体表現の分析

身体表現活動の特徴や傾向を把握するために、ビデオに収録した身体表現活動を、場面ごとに、身体表現を捉える観点(イメージの具体性、イメージの独自性、動き多様さ、動きの変化、動きの確かさ)の各項目の基準に従って3段階評価<sup>14)</sup>を行い、対象児個人の評価点とした。ただし、本稿では描画表現の変容の評価テキスト分析に特化し、身体表現活動の評価点との関連を観点とした考察は次回以降に譲るものとする。

##### 2) 描画表現の分析

###### 評価者

評価者	評価時間
評価者A: 保育経験のある大学院生	女 約 60分
評価者B: 保育経験のある大学院生	男 約 90分
評価者C: 幼児発達心理学研究者	女 約 80分
評価者D: 美術科学部生	女 約 40分
評価者E: 美術科学部生	女 約 60分
評価者F: 美術教育研究者	男 約 120分

###### 評価の手続き

身体表現活動前と身体表現活動後の2枚の絵を見比べた評価と感想を6名の評価者に口述してもらい、ビデオに収録し、その後、逐語化した。評価者に伝えた実験概要を以下に示す。

- ・1回目の描画活動(1枚目の描画)と2回目の描画活動(2枚目の描画)の間に、「雲」を題材とした身体表現活動を行った。
- ・1回目の描画活動の際には、「積雲」「雨雲」「飛行機雲」「雷雲」「夕焼け雲」の写真を提示した。2回目の描画活動では提示しなかった。
- ・身体表現活動では、「いろいろな雲」「雨雲」「飛行機雲」「雷雲」「夕焼け雲」を表現した。
- ・2枚の絵に対しては、身体表現活動前と後を明示した。(絵の読みとりには先入観が生まれ、評価にはバイアスは掛かるが、評価者は絵の専門家かつ身体表現の専門家ではないので、評価を言葉にすることに対して過剰な心理的負担を与えないようにするための措置とした。)
- ・身体表現活動での個々の子どもの表現内容は伝えなかったが、評価時に質問に答えることはあった。

###### 評価の分析方法:

描画表現の変容を捉えた評価者の評価内容の分析は、大谷のSCAT (Steps for Coding and Theorization)<sup>15)</sup>を参照した。SCATの手続きは、大谷に従えば、まず逐語化した評価者の言葉をセグメント化する。そこから、①注目すべき語句を抜き出し、②抽出した語句を言い換えるためのデータ外の語句、③それを説明するようなテキスト外の構成概念、④そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順に4ステップのコーディングを行い、その後、それらをもとにストーリーラインの記述

を行なうものである。本研究では、身体表現活動のなかで何を得ているのかの「何を」を明らかにすることが目的であるため、④の構成概念の生成までのステップを用いた。また本研究では、描画表現の変容を捉えた評価者の評価を分析するため、身体表現活動前の絵だけに関わるテキストは、4ステップ分析の対象としないこととした。分析データ例を表1に示した。

### III. 結果

#### 1. 描画活動の変容から捉えられた「身体表現活動によって得られるもの」

表1に例示した方法を用いて、対象児56名に対する評価者6名の記述を分析し、「身体表現活動によって得られるもの」として、表2に示すように18の《構成概念》を生成した。それらの《構成概念》を5つのカテゴリーに集約した。また構成概念生成の前段階としてのテキスト外の概念として、〈描画の変容から捉えられた様子〉と読み替えられる内容を記した。

身体表現活動によって得られるものは、題材への傾倒、題材に対するイメージの変容、表現要素への気づき、自己変容、他者意識の5つのカテゴリーにまとめられた。以下では、カテゴリー別に《構成概念》の命名の由来を、評価者の①テキスト中の注目すべき語句を例示して述べる。

##### 1) 題材への傾倒

題材への傾倒として集約されたなかの《題材への興味喚起》は、〈題材に対して率直に関心を持った〉様子の構成概念として命名された。例えば、A16児の描画に対して、身体表現活動前の描画を「雲とは関係のないものも同じようなウエイトを描いている」とし、後の描画に対して「雲と雲に関するものがメイン」「余計なものはなくなっている」と評した。またA1児の描画に対して「雲たくさん描いている」「雲がしっかり出る」としている。雲とはあまりかかわりのない他のものも描き連ねられた描画が、身体表現活動の後は、雲と雲に関係するものだけを描く様子から、身体表現活動の体験を通して「純粹に雲に対しておもしろさみたいなものを感じるところがあった」「印象に残ったんだね」と解釈した。さらにH18児の描画に対して「がらっと描くものが変わっている、飛行機雲じゃなくなるところを見ると雷雲に思いが移った」「場面が全然違う」「対照的で対極」と評した。その背景を「身体表現活動のなかで自分にとって最も印象的であった場面を描いた」と解釈し、身体表現活動を通して題材に対する興味関心が喚起されたことを捉えていた。

《題材に関する要素の統合》は、〈題材に対する断片的な要素や部分がまとまった〉様子が概念化された。H16児の描画を「雷と雨が一緒にあるが、いろんな雲と関連している」「ひとつの雲の姿としてまとまって

表1 SCATによる分析データの一例 (H14児)

評価者 番号	テキスト (評価者別)	① テキスト中の 注目すべき語句	② テキスト中の 語句の言い換え	身体表現活動の評価点					
				イメージ の具体性	イメージ の独自性	動き方の 多様さ	動きの 変化	動きの 確かさ	
				色々な形の雲 3.00	2.00	2.00	3.00	2.00	
				雨雲 3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	
				飛行機雲 3.00	1.00	2.00	3.00	2.00	
				かみなり雲 3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	
				夕焼け雲 1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	
				自分の好きな雲 3.00	1.00	2.00	2.00	3.00	
				平均	2.67	1.83	2.17	2.50	2.33

評価者 番号	テキスト (評価者別)	① テキスト中の 注目すべき語句	② テキスト中の 語句の言い換え	③ 左を説明するような テキスト外概念 (描画から捉えられた 変容の様子)	④ テーマ ・構成概念
B	雷の中に雨が感じる言くと、表現後の方がすごいそれらしいなって思うし、雲自体の大きさとながらみみたいなのものはっきり出ているなと思います。こっちは表現前の方はやっぱりありそうで実際にはないよねって景色かなと思うんで、どっか頭の中にあるっていうのが象徴的なものなのかなって思うんですけど、まあ雨も雷も鳴ってっていうのも現実的にあるかって言われたらあまりない気もするけど、こっちの方が日常に近いのかな、さりげなく雲の雷雲の上に太陽があって青空が広がっているっていうのがおもしろいなと思いますね。こっちでは一つの風景、一つの天気みたいなものが、天気っていういろいろあるよねって増えているし、実際雷雲っての、上には太陽ってあるよね、おもしろいです。	表現後の方がすごいそれらしい、雲自体の大きさとながらみみたいなのものはっきり出ている、こっちの方が日常に近いかな、さりげなく雲の雷雲の上に太陽があって青空が広がっているっていうのがおもしろいな、天気っていういろいろあるよねって増えている、実際雷雲っての、上には太陽ってある	写実的、現実的、意図的な描写、事実認識、科学的思考、知識の再統合	題材に対する断片的な要素や部分がまとまった、題材の捉え方が写実的になった	題材に関する要素の統合、題材イメージの具体化
C	この子は両方雷雲なんだ、でもなんかどっちの絵にも救いがあるっていうかさ、なんかかわいいうついかさ、雷雲なんだけども、でも写真にはこんなのないんでしょ、これは雷雲をそのまま描いてそのまま描きたい絵を描いた、これはでも二重だね、夕焼けなのか晴れなのか雨なのか雷なのか、全部かな、全部入っちゃったんだ、全部入っちゃったんだね、全部楽しかったのかも、全部描きたかったのかもしれない、こっち見ても思ったけどこの子豊かだから、何って言われても困っちゃう、全部描きたいから、そんな感じ、こんな雲があったらいいな、だから全部あったらいいなっていう風に描いたっていう風に感じました。	二重だね、夕焼けなのか晴れなのか雨なのか雷なのか、全部かな、全部入っちゃったんだね、全部楽しかったのかも、全部描きたかったのかもしれない、こんな雲があったらいいな、だから全部あったらいいな	題材が多様になった、身体表現のなかで自分がしたことをすべて描いた、身体表現の楽しさ、身体表現のなかで自分がしたことをすべて描いた	大胆さ、率直さ、けれんみのなさが現れて自由度が増した	開放感
D	こっちは最初からちゃんと雨雲描いて、稲妻描いてってあるんですけど、やっぱり下の方に山だとか木だとかの木の実だとかのサブのものも同じような重さで描かれているのに対し、表現活動してからは雲が一番真ん中に描いてあって、雲から出るものが細かく描きこまれているので、雲が主人公に変わっているのだと思います。	雲が一番真ん中に描いてあって、雲から出るものが細かく描きこまれている、雲が主人公に変わっている	題材イメージが焦点化した、表現の繊細さ、表現の工夫	題材に対する捉え方が絞られた、題材に対する捉え方が一般的でなく自分になった	題材イメージの明確化、題材イメージの独自化
E	トマトかなトマトかな、でもこっちはブツブツじゃないですか、やっぱり体で表現すると、ブツブツではないから、きつとみんなまとまるんですね。	体で表現すると、ブツブツではないから、きつとみんなまとまる	断片的、連続的、身体感覚、体感、リズム性、リズムパターン	題材のリズムパターンを感じた	リズムの意識化
F	へえ、おもしろいですね、雲が黒いんですね、そこから雷が落ちていて、雷の先ちょいにある赤いのが気になりますね、果実のようにも見えますし、果実の一個一個に落ちているなら面白い、もしかしたら火の玉かもしれないんですけど、何かこれは雷を描くときの力が入ったトントントントントンっていうのは描いている時の筆圧なんですけど、これがすごく心地よかったのかんなくてすごく感じますね、雷描いててすごく楽しいんだらうなってすごく感じました。こちらの絵は、雷雲があって雨も降っているんですけど、雨雲と雷雲が両方出てきているような気がしますが、なんだろう、太陽があるのもすごく興味深いです。最初の絵に比べていろんな雲が出てきているこの夕焼け雲なのかもしれないんですけど、こう最初の絵に比べていろんな雲が出てきているっていうのはやはり体を動かすことによって自分の中に雷雲さんが入って来たり雷雲さんが入ってきたら夕焼け雲さんが入って来てるっていう経験がここに表れている	雨雲と雷雲が両方出てきている、太陽があるのもすごく興味深い、最初の絵に比べていろんな雲が出てきている、体を動かすことによって自分の中に雷雲さんが入って来たり、雷雲さんが入ってきたら夕焼け雲さんが入って来てるっていう経験がここに表れている	イメージの多様化、実体験、身体感覚、身体的な想起、自己投影	大胆さ、率直さ、けれんみのなさが現れて自由度が増した、題材に自分がなった、題材に対する捉え方が一般的でなく自分になった	開放感、題材への自己投影、題材イメージの独自化

いる」と評し、雲に対する断片的な印象がまとまりを持って描かれるに至る様子が捉えられていた。その背景を「すごく思いを持って描かれている」と解釈している。またA18児では、「この虹の順番も間違っていないっていうところがすごい観察力、その虹っていうのは雨が降ってできるんだよ、雨が上がって太陽が出

てかかるんだよっていうことも、この子の頭の中にある、虹みたいな素敵なもの、雲が雨さん降らせてくれて太陽さんのおかげで出るんだよみたいな風にも見える」と評している。「雨が降って晴れたら虹が出るってわかっている」というように、〈題材に対する断片的な要素や部分がまとまる〉様子には、雲に対する科学

表2 描画の変容から捉えられた「身体表現活動によって得られるもの」

③ テキスト外概念 (描画の変容から捉えられた変容の様子)	④ 構成概念	カテゴリー
題材に対して率直に関心を持った	題材への興味喚起	
題材に対する断片的な要素や部分がまとまった	題材に関する要素の統合	
題材に自分になった	題材への自己投影	題材への傾倒
題材に気持ちを込めた	題材への感情移入	
題材をひとに見立てた	題材の擬人化	
題材に対する捉え方が絞られた	題材イメージの明確化	
題材の捉え方が写実的になった	題材イメージの具体化	題材に対する
題材に対する捉え方が一般的でなく自分なりにになった	題材イメージの独自化	イメージの変容
題材をもとにしたストーリーが生まれた	題材イメージの物語化	
題材の形や形態を感じた	形の意識化	
題材の動き方を感じた	動きの意識化	
題材のリズムやリズムパターンを感じた	リズムの意識化	表現要素への気づき
題材にかかわる空間・空間構成を感じた	空間の意識化	
題材にかかわる色彩を感じた	色彩の意識化	
大胆さ、率直さ、けれんみのなさが現れて自由度が増した	開放感	
ためらいや戸惑いが生まれた	迷い	自己変容
他者の行為を気にしたり模倣したりする	他者意識の顕在化	他者意識
他者と一緒にとしようとする	他者との協働への意欲	

的な知識を照らし合わせるような題材要素の再統合によって、観念的だった雲の捉え方を変化させる過程も含まれているようであった。

《題材への自己投影》は、〈題材に自分になった〉様子が概念化された。例えばA12児、A17児、H10児、H14児(表1)の描画に対して、「雲に自分になりきっている」「飛行機雲になっている」「マイワールド、自分目線、自分が雲になって」「いろんな雲が出てきている」と評し、「自分になりきってみたってというのが反映されている」「体を動かすことによって自分の中に雨雲さんが入ってきたり、雷雲さんが入ってきたり、夕焼け雲さんが入ってきてるっていう経験がここに表れている」と解釈されていた。またH19児に対しては、「彼は雲の中にいろんな形を探すのが好き、すごく不思議な絵、何かこう黒い雨雲のようなものの中に黄色い形、これは多分雷の塊のようにも見える」と評し、「身体表現することによって、自分が雲になりきると、雲自身が自分のような形になってきて、何かに見える雲というよりも雲の個性、自分をここで出したかった」と、《題材への自己投影》を解釈している。

《題材への感情移入》は、《自己投影》に類似する部分もあるが、例えばA3児の雲に表情が描かれた描画に対して「絵の中に気持ちが入り込んでいる」「自分の居場所に見えておもしろい」のように、〈題材に気持ちを込めた〉様子として捉えられたものが分類され

た。またA29児の描画に対しては、「控えめだったけど、楽しさが出てきている」「色味がいろいろたくさんある雲は本当に楽しそう」「自分が考えたオリジナルの雲」と評され、「楽しさとか心の弾んだ状態がこの雲に投影されている」「気持ちが動いた、自分の思いを描いている」と解釈するように、楽しい気持ちが溢れた結果として捉えられていた。本研究では「楽しい」という感情以外が評される描画はなかった。しかしながら、題材の性質によっては他の感情が表出され描画に表現される可能性は容易に想像できる。そこで、《題材への感情移入》として概念化することとした。

《題材の擬人化》は、〈題材をひとに見立てた〉様子が概念化された。A7児の描画に対して、「マイクがあったりとか、雲がいろいろな形に変化していて楽しいよって、雲に顔が出てます、夕焼けハート雲ちゃんとか、擬人化されてます」「本来顔のないものに描かれているってところを見ると、ここにすごく意味がある」と評し、「雲が命を得て、生き物と変化しているのは自分が雲を演じたというか、自分が雲になったがゆえに雲に命が宿った」と解釈している。幼児期には、アニミズムという生命のないものに生命や意思があると考えられる心理作用があり、描画においては、何にでも目鼻を描く段階がある。本研究で、身体表現活動後の描画に顔が描かれるのは、もちろんアニミズムの段階の幼児期こそその姿でもある。しかし、内的世界

と外部世界とが区別できないことに発現要因が求められているアニミズムに対して、本実験的实践における擬人化された描画は、身体を通して外部世界とかわり、かつ自分自身の身体で内的世界を感じる経験に発現要因が認められることに相違点が見られる。

## 2) 題材に対するイメージの変容

題材に対するイメージの変容として集約されたなかの《題材イメージの明確化》は、〈題材に対する捉え方が絞られた〉様子の構成概念として命名された。H19児の描画に対して、「中までしっかり塗りつぶしている、明らかにこっちとは違って描きたいものがはっきりした」「この雲が描きたいというイメージが出てきている」「色も増えて形も増えて、これを表したい」と評している。またH11児の描画に対しても「雲だけになった」と評し、「雲描きたいんだって気持ちが強まった」と解釈している。身体表現活動後に、題材のイメージが素朴に焦点化されている様子が捉えていた。

これに対して《題材イメージの具体化》は、〈題材の捉え方が写実的になった〉様子であった。例えば、H25児の描画に対して、評価者は「こっちの方がリアル」「幾何学的な模様が有機的な形になった」「描きたいものが具体化した」と解釈している。またH14児(表1)では、「すごいそれらしい、雲自体の大きさとつながりみたいなのものはっきり出ている、こっちの方が日常に近い」と評し、「表現前の方はありそうで実際にはないよねって景色、どっか頭の中にあるっていうのか象徴的なもの」が、身体表現後には題材を写実的に描くようになってきた様子が捉えられていた。リュケ<sup>16)</sup>は、子どもの描画には、知的写実性と視覚的写実性があるとしている。知的写実性は自分の知っていることを描くことであり、子どもらしい絵の特徴と述べている。それに対して、視覚的写実性は見たまま描くことである。ここで概念化された《題材イメージの具体化》としての写実性は、身体表現活動後に、より視覚的写実性が促される傾向と考えられた。

《題材イメージの独自化》とは、〈題材に対する捉え方が一般的でなく自分なりにになった〉様子であった。A19児の描画に対して、「(象徴的なものに) 対してこちらは幻想的、こういう空は見ないし、ないだろうけど」と独創的な描画への変化を評し、その背景を「ないってことに縛られない自由さみたいなのを感じる」「スタンダードからオリジナルへの変化」と解釈していた。またH14児(表1)では、「雲を2層に描くってすごい」「雲が一番真ん中に描いてあって、雲から出るものが細かく描きこまれている」と評し、「イメージがより豊かになった」「空だけの世界に入り込んでいく」「雲が主人公に変わっている」と、その子どもらしいイメージが生まれてきた背景を解釈している。さらにH6児の描画に対して、「こんな色があつたら素敵だなんて描いて、この子なりの自由な感じが出て」「実際

にはないだろうけど形のある色のある雲、子どもらしい自由な発想」「独自だよ、すでに雲じゃない」「いろいろな雲の個性に向き合っている」と評し、同時にそうなった要因を「すごい自由なものなんだっていうのがあるのかな、身体表現の後は」「もしかしたら(身体表現活動で) いろんなことをやったがゆえに、一つ一つ不思議な雲たちが生まれてきている」と、身体表現活動の特性に解釈を拡げていた。

《題材イメージの物語化》は、〈題材をもとにしたストーリーが生まれた〉様子が概念化された。A17児の描画を、「体を使った表現の中で自分なりのストーリーがあった、そこから生まれた風景画」と評したり、A14児の描画を「(身体表現活動で) 自分の雲に飛行機雲の友だちがいっぱい突っ込んできたかな、この子なりのストーリーがあつて描いた」と評したりした。またA16児に対しては、「このストーリーの続きというか、さらに体を動かすことによってストーリーが思い浮かんで、雲を描くというよりも雲を通した登場人物というかが生まれてきたよう」と評しているように、身体を動かす経験によって、時間的な流れを体感し、その時間を表現しようと自由度が増し、それがストーリーとなって描画に反映されたと解釈された。

## 3) 表現要素への気づき

表現要素への気づきとして集約されたなかの《形の意識化》は、〈題材の形や形態を意識した〉様子が構成概念化として命名された。A19児の描画に対して、評価者は「稲妻のギザギザがすごく印象的になった」「稲光の数も違うし、太さも全然違うし、こっちの方が稲光が強い」「一本線だけど、前よりもより規則的で、形をすごく意識して描いている」と評している。またA13児に対しては、「横長のモクモクが、いろんなモクモクの不定形の形になって」「雲の縁どり、黒で囲っている」と評し、その背景を「雲を強調したかった」「囲いとかポアポアって雲のイメージだと思うからいい経験したんだってというのが感じ取れる」と解釈している。身体表現活動のなかで〈題材の形や形態を感じ〉、それが表現の要素として描画に反映されたと捉えられた。

《動きの意識化》は、〈動き方を感じた〉様子が概念化された。例えば、A23児の描画に対して、「動きがすごく出ているような感じ、存在感のある黒い雨雲の後ろにすごい動きのある白い飛行機雲が飛ぶってところがすごく動きを感じる」「飛行機雲のこの動きはすごい楽しそうに出ている」「いろんなところに通りながら通っていく雲」「飛行機が飛んだ流れがすごい勢い」と評し、「この動きとかが、たぶん遊びの中ですごく気づきとかがあつて」と解釈している。「雲」という題材に対して、その〈動き方を感じた〉ことによって、描画から動きが感じられるようになった変化が捉えられていた。またA24児に対しては「なんかモクモクした、



フワフワした感じに変わっている」と評し、「白いモクモクっていう動きとかを自分がやったから」「モクモクっていう動きが強く印象に残った」と解釈している。身体表現活動で身体を動かしたことによって、題材のモクモクやフワフワといった〈動き方を感じ〉、それが表現の要素として描画に反映されたと捉えられた。

《リズムの意識化》は、《動きの意識化》に類するとも捉えられるが、〈題材のリズムやリズムパターンを感じた〉様子として分類された。例えばH13児の描画に対して、「雲を表現するときにポンポンポンポンンって」と評し、「自分の中で小さい雲の動きのようなものが印象に残った」と解釈している。またH6児に対して、「グルグルグルって感じの動きも出てきて、形じゃなくて気持ちみたいな」とし、A19児に対して「キュキュキュキュキュキュキュキュツツっていうことで雷を表現したかった」と評し、その背景を「自分が雷を表現したときにリズムカルに楽しく動いた」と解釈している。強弱長短の流れという時間性を伴った動き方への気づきとして、《動きの意識化》と区別され、《リズムの意識化》とされた。さらにH14児に対して、「こち（前）はブツブツ、体で表現するとブツブツではないから、みんなまとまる」と評するようになり、リズムの有機的なまとまりとしてのリズムパターンへの気づきと捉えられるものも見られた。

《空間の意識化》は、〈題材にかかわる空間・空間構成を感じた〉様子が概念化された。例えば、H8児の描画に対して、「雲は上にあるものだと思って上に描いているけど、後の絵は白が下にきている、手の届かない雲が自分の目線の中にある」と評し、雲を画面の上の方に描くという観念的な構図から、雲を画面の中央に描くという構図を意識した変化が捉えられていた。またA14児では、「俯瞰図、おもしろい、これ飛行機だよ、飛行機が空飛んでいるのを俯瞰している」「平面から立体へみたいな感じすら覚える」「飛行機じゃなく光の塊なのかもしれない、真ん中に集まっていくというか、展開図のようにも見えて」「これは真上から雲を真上から描くような感じで、視点がすごく変わって、目の位置が変わっているような感じ」と評し、「ここの中に自分が雲だっている部分が表れている」や「こち側はいろんな雲に、飛行機雲になってみて、さあ動いてみてっていうのを、そういう経験があったからこそ、このすごい広がりのある絵」と解釈している。さらにH20児に対して、「ちょっと気になるのはこの余白」「描いている面積自体はすごく少ない、目線的に上の方にある空と、夕日だろうなと思う半かけの太陽、沈んでいるっていうのがちゃんとわかる、逆にだからあえてその下を描いてない」「面積自体はすごく減っているけど、減ったからこそ伝わってくる情景もある、よく伝わってきます」と評し、身体表現後、描画面面の使い方がむしろ狭くなったり、限られたスパー

スで表現したりする様子も捉えられた。その要因については「身体表現した後にこちを描くっていうのもおもしろい、エネルギーとしては最初の方が強い感じがする」「どう（身体表現を）やったんだろ、なぜこうなったんだろっていうのはすごい興味のある」としており、身体表現活動の経験によって、エネルギーの高まりというだけではないものが生まれること、そしてそれは、ただ画面を埋め尽くすのではない、題材のイメージに相応しい空間を用いて描画を構成しようとする意識の促進として捉えられた。

《色彩の意識化》では、〈題材にかかわる色彩を感じた〉様子が概念化された。色彩は、幼児の描画にとって基本的な要素<sup>17)</sup>とされるが、一方で身体表現という活動では、色という要素は、表現の構成要素とは考えられていない。その意味では、身体表現活動によって直接的に色彩への意識が生まれるというよりも、題材への傾倒、題材に対するイメージの変容を介して、色彩を感じ工夫して描くようになる様子と捉える方が妥当であろう。例えば、H16児の描画に対して、「すごくきれいな黒い雲、ただの黒じゃなくて水色や緑や黄緑や赤や非常にいろいろなものが混ざっている」「一色だけじゃなくて、黒い雲を描く中にも下に、いろんな色が混ぜてあって、色の変化だとか重たさかな、ちょっと違った表現がされている」「雲の奥行き、これは一色で塗っているのに対し雲にも形というか奥行きというか」と評し、「雲の存在感にこの子は気付いている」「自分の感情の高まりというか、心の動きがすごく出ていて、ドラマチック」と解釈している。A28児に対して「一つの雲がいろいろな色を発している」と評し、「雲自身がどんどん変化していても面白いと感じた」と解釈している。身体表現活動を通して「自分が、一人の人間がいろんな雲を表現することによって生じてきたもの」と、その背景を捉えている。またH7児の描画に対して、「この子なりの雲のイメージが今度虹色になった」「形より色」と評し、H21児に対しては「虹色のようなイメージっていうのはやはり雲自身にも単色じゃなく、いろいろな動きをすることによって、雲の個性というか色というのが表れているんじゃないかな」、A22児では「自由度が増した雲のようにも見えるというか、雲=白ではなくても面白いよねっていうところ」と評している。それらの要因として、「きつといろんな印象が増えた」「すごくうきうきした楽しいことが表現したかった」「よく見るものっていう固定的なものなのから、自由な発想になっている」「雲というモチーフを使ってイメージを膨らませている」と解釈している。動きで表現する経験が、色彩への意識を写実的または科学的に高めたり、感情的な高まりを促進させたりして、色使いを変化させる様子が捉えられた。

#### 4) 自己変容

自己変容として集約されたなかの《開放感》は、〈大

胆さ、率直さ、けれんみのなさが現れて自由度が増した) 様子が概念化された。A3児の描画に対して、「どんどん好きなものも出てきている」と評し、「元気があふれ出ている」という率直さを解釈している。またH14児(表)では、「全部入っちゃったんだ」と評し、「全部楽しかったのかもしれない、全部描きたかったのかもしれない、こんな雲があったらいいな、だから全部あったらいいな」と自由度が増した様子として解釈されていた。A12児では「ものすごくダイナミック、飛行機雲になっている、色もいらねえっていうかそのものだみたいな」、H14児(表)では「夕焼けなのか晴れなのか雨なのか雷なのか、全部かな」と、大胆さやけれんみのなさを評し、共通して「見たままを描いたんじゃないで、身体表現そのものを描いたんじゃないかって気がする」と解釈している。身体で表現したことによる描画への影響というよりも、身体表現そのものの経験を描画にしたとプロセスも、開放感を得たことによる自由度の高まりと捉えられていた。

これに対して《迷い》は、〈ためらいや戸惑いが生まれた〉様子として概念化された。A11児の描画に対しては、「同じ、基本変わらない」「最初に描いたイメージがそのまま残っているだけ」「何描こうか、迷いが出てしまっている」と評し、「身体表現の中で悩んだ結果がここに表れている」と解釈している。またH24児に対しては「こっちは飛行機も出てこないし何となく黒い雲で、でもなんだろうね、これで十分って思ったのかな、別に他のものを描きたいわけでもなく」「色が途中で抜けているので、どの雲描こうか迷ったのかな、曇りの雲も描いて、晴れの虹っぽいのも描いてあるので迷いながら描いた」「プラスとかマイナスとかじゃなくて」「上の方だけ描くっていうのはなんなんだろう」と評し、「雲になりきって、雲がいっぱいあるなってわかつちゃって、ちょっと描くのに迷った」「思うような身体表現が表現できなくてっていう子なのかもしれない」と、《迷い》の背景を解釈した。

#### 5) 他者意識

他者意識として集約されたなかの《他者意識の顕在化》は、〈他者の行為を気にしたり模倣したりする〉様子が概念化された。A2児の描画に対しては、「さっきの子の絵をまねしたかもしれない」「みんなお互いに見たのかもしれない」と評し、模倣行為の可能性を解釈している。またA20児に対しては「周りの子に気づいたのかもしれない」と解釈している。身体表現活動によって、自分以外の他者の存在や表現に気づいた様子と捉えられていた。

《他者との協働への意欲》は、〈他者と一緒にしようとする〉様子であった。A1児の描画に対して「友達同士で楽しみながら描いた」と評し、「友達とのかかわりを楽しむ」様子が捉えられていた。A3児では、「よくある雲の絵が描かれていて、一緒にいたのかな」「お

隣同士に影響されているのかな」と評しながら、「雲だけじゃない楽しい気分になったのかなっていう、お友達がいたり自分も出てきたりしている、一緒にやりたくなるっていう」「友達とするのが楽しくなっている、その子の気持ちが表れている」と解釈している。表現の世界においての子どもたちは、しばしば同一の対象に対して、身体を通して共通性を見出し、意味を分かち合う協働を行うという根源性を有するという、メルロ＝ポンテ<sup>18)</sup>の説にも裏付けられる。

## IV. 総合考察

本研究では、幼児が身体表現活動のなかで何を得ているのかを検討するために、身体表現活動前後に描画活動を行う実験的实践を行い、その描画の変容に関する評価者の口述テキストを分析考察する方法を試みた。

その結果、身体表現活動によって得られるものとして、5カテゴリー18概念が抽出され、それぞれの得られるものは、換言すれば、得られる力として以下のようによまとめられた。

題材への傾倒の5つの構成概念(題材への興味喚起、題材に関する要素の統合、題材への自己投影、題材への感情移入、題材の擬人化)からは、身体表現活動によって、子どもたちが題材になってみる経験をする事によって、題材そのものに興味喚起され、意識され、さらにそれによって題材をより自分のものとして思いを寄せる力を得ていることが示された。

題材に対するイメージの変容の5つの構成概念(題材イメージの明確化、題材イメージの具体化、題材イメージの独自化、題材イメージの物語化)からは、子どもたちが身体表現活動において題材になってみる経験をする事によって、題材に対するイメージを様々な方向へと変容させながらも、より焦点化させ、創造的に発展させる力が得られることが示された。題材に対するその子どもなりのモデルを形成する力を得ているとも捉えられた。

表現要素への気づきの5つの構成概念(形の意識化、動きの意識化、リズムの意識化、空間の意識化、色彩の意識化)の、色彩の意識化を除く4つの構成概念は、身体表現を成立させる要素<sup>19)</sup>としての身体フォーム、力性、時間性、空間性の要素に通じるものであり、身体表現活動後には、描画に身体表現の要素が反映され、描画を工夫変容させる力が得られることが示された。色彩の意識化については、題材への傾倒、題材に対するイメージの変容を介して、色彩を感じ工夫して描くことができる力と捉えられた。身体表現活動によって、形、動き、リズム、空間、色彩に対する意識が形成されると言える。それによって自分なりに形成したモデルを実現させるための表現方法や技法を得



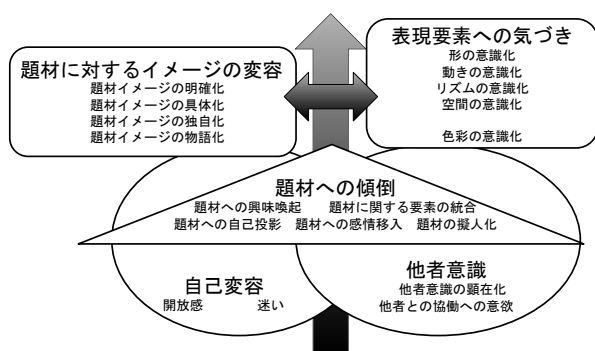


図1 身体表現活動で得ているもの(カテゴリー間・構成概念間の関連)

ている。

自己変容の2つの構成概念(開放感, 迷い)からは, 身体表現活動からは無条件に開放感を得られ, 一方ではそこでの何らかのつまづきや消化不良の状態が迷いとして意識化される場となることがわかった。

他者意識の2つの構成概念(他者意識の顕在化, 他者との協働への意欲)は, 身体表現活動が, 他者の活動を「いま, ここ」で目にする経験となり, 他者の様子や表現に気づき, 共に表現したいという意欲喚起に繋がる力が得られることが示された。

以上の5カテゴリー19概念は, 1回の身体表現活動に1カテゴリーまたは1概念が見られるのではなく, 複合的あるいは関連を持って抽出された。これらの関係を, 身体表現活動の「いま, ここ」から得ているものとして, 図1のように図式化した。身体表現活動から得ているものは, 幼児にとっての「身体性がある」とは何かという課題に繋がると考えられ, その問いへの一つの答えを提示するものとなったとも言える。つまり, 「身体性がある」とは, 「動くことによって得られた五感情報を, 対象となる題材と実感として融合させられる」ことではないかと考察された。この実験的実践に立ち会った研究者, 保育者, 学生のすべてが, 身体表現活動後の描画活動を開始した途端に目にしたのは, 多くの子どもたちが雲の絵を描くことに迷いなくなり一気に描き進めた様子であった。この光景を含めて, 表現領域における身体表現分野の独自性, つまり主体と客体として身体を使う経験を活かした活動の方法や支援を考える示唆が得られた。

本研究では, 描画そのものの分析ではなく, 描画に対する評価者の口述テキストからの分析によって, 身体表現活動のなかで得ているものを抽出する質的な分析方法を試行した。描画と身体表現活動内容との関連を客観的に裏付けていないため, 描画表現としての発達による現象と, 身体表現活動による影響との区別が客観的に検証されていない。具体的には, 身体表現活動で自分がしたことを描いただろうという様子と, 身体表現活動での身体の感覚から得たものが現れたら

うという様子が混在して認められ, 評価者には, それら違いの判断ができなかった。本方法の限界として認められ, その改善を含め, 引き続き, 保育における身体表現活動の特性を明らかにする研究を重ねたい。

## 引用文献

- 1) 庄司康生, 表現の基礎としての身体, 保育内容・表現, 榎沢良彦(編), 同文書院, 2006, 53-68
- 2) 古市久子, 2013, 保育表現技術一豊かに育つ・育てる身体表現一, ミネルヴァ書房, 3
- 3) 鈴木裕子, 保育者の資質能力としての身体表現の理解, 保育学研究, 51, 2013, 175-178
- 4) 長野真弓, 幼児における身体表現活動の実践・研究の課題ならびに科学的視点からの提案, 心理社会的支援研究, 1, 2011, 29-34
- 5) H・レフコ, 平井タカネ(監修訳), ダンスセラピー:グループセッションのダイナミクス, 創元社, 1994, iii
- 6) 八木ありさ, 大学生を対象としたダンス・セラピーワークショップの効果検証における「気分調べ」と「色名記述」の有効性, Research Journal of JAPEW 30, 2014, 17-28
- 7) 前掲5), iii
- 8) 富田喜代子, 幼児画の研究(2)―自己回復への歩みと絵画表現について―, 日本保育学会大会発表論文集, 56, 2003, 462-463
- 9) J.H. デイ・レオ, 白川住代子・石川元(訳), 絵にみる子どもの発達(分析と統合), 誠信書房, 2001, 90
- 10) F. フロン, 加藤義信・井川真由美(訳), 子どもの絵の心理学入門, 白水社, 2002, 24
- 11) 浜田寿美男, 身体・自我・社会, ミネルヴァ書房, 1984, 138
- 12) 古市久子, 保育表現技術一豊かに育つ・育てる身体表現一, ミネルヴァ書房, 2013, 3
- 13) 平井タカネ, リズム身体表現後の描画に関する一考察: 樹木画を中心に, 奈良女子大学スポーツ科学研究, 6, 2004, 71-78
- 14) 鈴木裕子・西洋子・本山益子・芳川京子, 幼児期における身体表現の特徴と援助の視点, 舞踊学, 25, 2003, 23-31
- 15) 大谷尚, 質的研究シリーズ SCAT: Steps for Coding and Theorization - 明示の手続きで着しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法, 感性工学, 10(3), 2011, 155-160
- 16) G.H. リュケ, 須賀哲夫(訳), 子どもの絵―児童画研究の源流, 金子書房, 1979
- 17) 前掲書10), 26-32
- 18) メルロ＝ポンティ, 知覚の現象学1, 竹内芳郎・小木貞孝(訳), みすず書房, 1945, 45
- 19) 西洋子・本山益子・鈴木裕子・吉川京子, 子ども・からだ・表現: 豊かな保育内容のための理論と演習, 市村出版, 2003, 49

(2015年9月15日受理)